

の歌

片岡なおこ

現代日本史の区切りとなるだろう大震災である。短歌にかかわっているからには、何首かは大震災の歌を作っておきたい。そんな思いを率直にうたつて、実感のこもる作とした。

志は天に向けよと泰山木夏さきがけてかつきりと咲く
鳥居かほる

泰山木のすつきりした咲き方を表現した結句が、いい。「志は天に向けよ」は、人によって評価が分かれるところだが、私はよしとしたい。

液化してゆくのか長き顎ヒゲも怒り祈りも水葬され
大野道夫

五月に米国海軍特殊部隊によって射殺され、ただちに水葬されたと伝えられたビン・ラーディンをうたう。アメリカ軍発の情報としてしか知り得ない死をうたうのは難しい。その難しさにあえていどんだ作と読む。

目つぶれば小夜時雨なり熟れ蚕なる白きうねりが桑
食む音は
花美月

カイコ棚のカイコたちが、いつせいに桑の葉を食う音はすさまじい。その音をクローズアップして特色を出した。蚕の歌にひさびさに出会った気がする。

むかし、明治から昭和四十年代までの新聞投稿歌を中心に、「農民短歌史」を調べ、書いたことがあった。明治からずっと、農民の短歌という「田の歌」と「蚕の歌」がほとんどだった。それが、昭和三十年代になると

「蚕の歌」が激減する。劇的に減るのである。化学繊維の出現と、労働力の安い国に絹の世界シェアを奪われてしまったからである。そんなことが思い出された。

桜咲き散り若葉の季となりまだ揺れてゐるころと
荻野美佐子

上句ちよつと読みにくく、一度読んで、無意識のうちにもう一度読んでしまう。それでもうまく読めない。一音足りないのである。その不安定な感じが内容とマッチしている。そう読んだ。

眠れぬと母のこぼせる真昼間を夜としてわれも眠れ
クリシュナ智子

作者の父上の会社が震災の津波で壊滅的被害を受けた。母との電話で被災の状況を伝えられた場面のように。日本とアメリカの時差と空間的距離の重ね方に工夫があつて、「眠る・眠れない」「夜・昼」が、奇妙にねじれる感覚をうまく作品化した。

たくさんの玩具の中になつたのが大きくなったのは
私だけ
武藤義哉

幼年期そして少年期をうたう一連中の作。口語で、しかも散文的文体で表現しきつている点が特色である。

一連中に、結句の末尾が「であった」「だった」が三首もある。一首一首は、内容的に面白いが、こういう文体の作が何十も並んでいたら、読者は飽きてしまうだろう。そんなことを思った。